

公園は地方創生のシビルミニマム ～日本一小さな舟橋村「園むすびプロジェクト」の取り組み～

Park is a Civil Minimum for Regional Creation
-Efforts of the Smallest Funahashi Village in Japan "Enmusubi Project"

金岡 伸夫 *Nobuo KANAOKA*

金岡造園・柴崎農園・福田園 建設共同企業体
Kanaokazouen-Shibasakinouen-Fukutaen Joint Venture



1. はじめに

中小企業を取り巻く現状は、公共事業関係費が平成10年をピークに減少、加えて人手不足など深刻な社会的課題に直面し、元気がないと言われて久しい。このような話題は公表されている資料を閲覧するより、富山県で造園業を営む私のような地方の中小企業経営者にとって、リアルに体験してきた事である。公共工事発注数の減少、公園管理費の削減、民間における庭の駐車場化や庭木伐採など造園業活躍の場は減少している。加えて新規・中途採用共に就業希望者は少なく、人員の確保が困難な状態が続いている。

課題が山積し先の見通しが明るくないと感じていた私は、新たなビジネスチャンスを模索する中で、富山市に隣接する人口約3千人、面積約3.47km²の日本一面積が小さな自治体である富山県中新川郡舟橋村が発表した一つの事業に目が留まった。舟橋村は、今後の人口減少・急激な少子高齢化を富山大学と連携する中で予測検証し、平成27年に「舟橋村地方創生総合戦略」を策定、人と人とのつながりによる安心感が育む地域の共助体制の強化がまちづくりの基盤として重要であると結論づけた。地方創生の数値目標（KPI）に①子育て世代の転入促進、②出生率の向上、③県内企業のしごとづくりの3点を掲げ、主要事業として「子育て共助のまちづくりモデル事業」を発表、村の中心部に位置する京坪川河川公園周辺をモデルエリアとし「認定こども園」「子育て支援賃貸住宅」と並んで「京坪川河川公園」も目標達成の重要な役割を担う施設として、パークマネジメントを担う造園事業者の事業参加を求めた。

2. 事業に採択されてから

同世代の同じ悩みをかかえる同業者に声をかけ、一緒に企画コンペに参加。私自身の事業提案に限界を感じコンサルタントの協力も得て、選定業者に採択され、村での仕事がスタートした。村からは当然、掲げた目標達成へ向けての事業推進を求められ、事業提案をもとに、植栽管理は当然のことながら、地元造園組合や各種団体で培ってきた企画イベントなどの自主事業の展開を提案した。しかし村を中心としたプロジェク

ト推進委員会からは、「公園の集客数増が本事業の目的ではないですよ」「村の事業コンセプトをちゃんと理解できていますか？」とのやりとりが繰り返され、頭の中が真っ白になった。当時を振り返るとプロジェクトの中心者を捕まえては「答えを教えてください」と言っていたのを覚えている。今まで通り、植栽管理を行い、加えて公園での自主イベントを開催していけば納得してもらえると考えていた私と、「転入促進」「出生率向上」を公園マネジメントの成果として求める村との間で、認識が一致するはずもなかった。

3. H27～28年度の取り組み

事業計画が決定しないまま、事業を進めていかなければならず、初年度（H27）は、「子育て支援センター」と「図書館」でヒアリングを行った。両施設は村内外から多数の利用者があり、実際に利用している生の声から、何が求められているのかを掴み、特にソフト面において公園に必要とされることを把握することに力点をおいた。しかし、子育てに必要な公園との問いに、ハード面の充実を望む回答が大多数で、なかなか求める意見を得る事ができなかった。

それでもヒアリング結果を考慮し、平成28年度は公園イベントの開催を計画した。村の担当者と周辺地域の全戸訪問など広報活動を行ったにもかかわらず、初回の参加者は3名のみ、造園業者単体で地方の知名度の低い公園イベントを運営するのは労力がかかり、費用対効果が悪くハードルが高いことを痛感した。下半期からは他団体との連携を模索、子育て支援センターと共催・連携イベントを実施し、多くの親子連れを公園に呼び込むことに成功した。造園業の技術を生かした竹細工などのイベント内容も好評を得たが、集まった大勢の来場者対応に追われ、イベントに徹する結果となった。

村の掲げる目標達成へ向け「ここに住みたい」へ繋がる公園づくりを目指し、人を巻き込むための活動へ力点をおいた。公園に関わる人、一緒につくる人、動かす人を募る活動として「園むすびプロジェクト」を立ち上げたが、公園ボランティア募集から始まったこのプロジェクトは、今までの知識や経験から抜け出せず、暗中模索の日々が続いた。

4. H 29 年度の取り組み

「何もない公園」に人を呼び込む事に成功し、その先へ進むため、なぜ村の小さな子育て支援センターに多くの子育て世帯が集まるのか、そこからの知恵を公園に取り入れることで局面の打開を図った。

平成 29 年度は、小学生にターゲットを絞り「公園のことは公園をよく使っている人に聞くのがいちばん」と村の担当者の意見を取り入れ「こども公園部長」を発足した。募集に先駆け開催した PR イベントは、子ども達の自由な発想を最大限取り入れたかったため「公園には禁止がいっぱい」という子ども達の公園に対する固定概念を崩すために実施した。当時 7 名のこども公園部長が誕生し、保護者も巻き込みながら公園マネジメントを展開できた。(※平成 31 年 4 月 22 名が誕生予定)

子ども達の意見を公園づくりに活かすため、本プロジェクトで心がけているのは、企画から資金調達、運営、管理まで全てを担ってもらうことである。「この公園に来たら一緒に遊びたくて、いつの間にか仲良しになる公園」が公園部長の目指すイメージとなり、公園の未来予想図が出来上がった。実現のため「募金活動しよう」との発案でクラウドファンディング「公園つくるんデス！～日本一ちっちゃな村の小学生と造園屋さんの挑戦～」を行い、「一人じゃ遊べない遊具を作りたい」とのコンセプトが共感を呼び、全国各地から支援を頂いた。最大の成果は、資金調達ではなく、関わった多くの人たちがこの公園に関心を抱き、自分に関わった公園として愛着をもって子ども達の公園づくりを見守ってくれるようになった点である。

5. H 30 年度の取り組み

昨年より毎月 1 回、基本第一日曜日に「月イチ園むすび」を開催し、公園を舞台に人の輪をひろげようとする取り組みを行っている。利用者の視線を取り入れたプロジェクト推進のため、地元を中心に子育て期の母親をスタッフとして雇用し、この母親スタッフとこども公園部長が主体として関わることで、月イチ園むすびは“旬な”活動となった。この月イチ園むすびのテーマは「愛着」と「期待感」であり、実際に公園の生垣を直に剪定してもらうなど体験型企画などを通して、「ほくが作った遊具がある」「この生垣は私が剪定した」という公園への『愛着』と、「ここに行けば何かおもしろいことがあるそう」という『期待感』を生むことを狙ってイベントを企画している。

また、当日は来園者がスタッフとして活動している点が目撃されており、舟橋村生活環境課長吉田氏は『「与えられるサービス」ではなく、「関わることで得られる楽しさ」に利用者が集まる』と語り、この傾向は公園のイメージ変化による公園の秘める可能性を芽生えさせた「新しい公園のカタチ」と考えている。

6. おわりに

私は事業開始当時、理解できていなかったが、村と私が手掛けた公園マネジメントは、村の人口減少を歯止めする「転入促進」と「出生率向上」の実現を約束（コミット）していたことになる。公園に人が集い、地域に必要とされ、公園がもつポテンシャルを最大限に引き出すため、造園業者は覚悟しないとイケない。加えて私のような地方の小さな造園業者にとって、成功のカギは村が私とともに歩んでくれたように、行政サイドの伴走も重要であり、連携するさまざまな企業・団体の力も必要である。

私が目指したいのは「この公園があるから子どもを産んでみようと思った」という地方創生に繋がる公園づくりであり、これを実現する公園管理システムの構築が造園業の新たな仕事づくりに繋がると思っている。

本稿の内容は従来の公園管理と同じに映るかもしれないが、KPI 設定や取り組み方をデザインする先に、公園は、地方創生・人口減少克服へ大きな可能性を秘めるシビルミニマムとしての存在意義を確立できると考えている。

冒頭でも述べたように、本事業に参加したのは造園業界の将来に不安があったからであり、そして村から求められた KPI 達成への道のりは、真っ暗な答えの見えない暗中模索の日々であった。しかし現在は、NHK の全国ネットなど多くのメディアにも取り上げられ、第 34 回都市公園等コンクールで「国土交通大臣賞」として一つの結実をみた。

本事業はまだ道半ばだが、前進し支えてくれる方々との出会いを通して、「地方創生」といっても目の前の課題に果敢に挑戦していくことであると実感している。楽しみながらファンを増やし、周りの人が口コミで情報を広め、安心感と期待感を育てていけば、利用者に愛される空間となり、それが新しい公園管理の在り方の一つだと感じている。

地域課題に挑戦し、自分たちが携わるフィールドのポテンシャルを引き出し、真の役割を担っていけば、造園業者は地域に必須な存在となり得ると確信している。

なお本稿は既往報告*1*2*3)、地方創生加速化交付金申請書、舟橋村地方創生関連会議での説明内容など、既公表資料を再構成し、新たな原稿として書き起こしたものである。

(略歴)

1976 年富山県生まれ。大阪芸術大学大学院前期課程修了。修士（芸術文化学）。有限会社金岡造園 代表取締役。

参考文献

- *1 公園緑地 Vol78 No5 2018 挑戦者たち 40-41 公園緑地協会
- *2 公園緑地 Vol77 No5 2017 まち・みどりの話題 2 58-59 公園緑地協会
- *3 都萬麻 II 2018 人口減少はビジネスチャンス新たな地域づくりによる移住・定住 28-49 富山大学芸術文化学部